

ブンブン★
ジャーナル

事実は
小説よりも
奇なり!?

辞書のあれこれ



作文にとりくむとき、欠かすことのできないのが辞書・事典です。いわゆる国語辞典はもちろんのこと、さまざまな国のことばや、ときには百科事典で何かを調べなければならぬこともありますよね。

もしもお子さまが、勉強中に辞書や事典に手を伸ばしはじめたら、しめたもの。自学自習が身につけてきたあかしです。「ブンブンどりむ」はそうしたお子さまの意欲をキャッチして、ますます学習がはかどるように関与された教材ですが、ぜひ保護者のみなさんも学習を手助けしてやってください。

では、今回はわたしたちに親しみのある、辞書にまつわる本をご紹介します。

書店へ足を運んでみると、新学期ということもあって、さまざまな辞書がところ狭しとならべられていきます。

国語辞典、漢和辞典、各国語辞典、古語辞典、カタカナ語辞典、ことわざ辞典、熟語辞典、六法、大阪弁や名古屋弁をはじめとする「方言」辞典、現代社会のキーワードを説明する辞典、文学辞典・数学辞典といった専門書など……じつにヴァリエティ豊か。

わたしたちが暮らす「世界」が広くなり、価値観が多様化するにしたがつて、用いる言葉や意味が、それだけ充実してきたということかもしれません。そんな数々の「辞書」に関する本のなかから、ユニークで、手に入りやすいものをピックアップしてみます。

(入手可能なものは最新の版を記載しましたが、一部、入手困難なものもあります。)

漢字のたのしみ

▼「魚へん漢字講座」

(江戸家魚八、新潮文庫、2002)

お寿司屋さんなどで、魚の漢字ばかりが書かれた湯飲み茶碗を見たことはありませんか？

あの独特な漢字に魅せられた著者が、「魚」にまつわる漢字を調査・収集したのが本書です。そればかりか魚の生態や味、調理方法にまで話は及んで、興味はつきません。

たとえば「鮪(まぐろ)」って、常温で時間がたつと真っ黒になるから、あるいは目が黒い↓目黒↓「まぐろ」って言うなんてご存知でしたか？

▼「遊字典」

(現代言語セミナー編、

角川文庫、1986)

「近代から現代までのあらゆるジャンルの文学作品の中から選び出した、正式表

記ではないけれど心を魅きつける文字表現8140語を収録」という、読んでいただけでもおもしろい「字典」です。

たとえば、「がっかり」の項には、「落魄」(「漢字四迷」)、「疲劣」(内田魯庵)、「因噎」(国木田独步)といった明治の文豪の用例から「失望」(井上ひさし)にいたるまで、6つの実例が挙げられています。「がっかり」にも、いろいろな表現(当て字)があったことがわかりますね。

そのほかにも、西欧の小説、衣服、料理の和名や作家のペンネームをはじめとするコラムも充実しています。現在は「品切」なので、古書店などでさがしてみてくださいね。



やっぱり
「新解さんの謎」

近年の辞書ブームの火付け役となったのが、赤瀬川原平著「新解さんの謎」(文春文庫、1999)です。著者の赤瀬川は、「知人」から教えられた、三省堂版「新明解国語辞典」(とりわけ第3版)

『広辞苑』の挿し絵画家

ご存知ですか？

国語辞典のスタンダードとして親しまれている岩波書店版「広辞苑」。そこに、数多くの動植物や建築物の挿し絵を描いていたのが、画家の牧野四子(まきのよねこ)・1900-87)です。ほかにも、『朝日ラリス世界動物百科』『原色動物大図鑑』などで目にしたことがあるかもしれません。京都と東京を中心にさまざまな活動したかれの業績は、最近ようやく再評価されつつあります。

みなさんのなかには、『広辞苑』のイラストを見ながら、自分でスケッチブックに絵を描いてみたかたも多いのでは？

の、かなり主観的な表現にあれよあれよというまに引きずり込まれていきます。

「さわり

(「御器がぶり」の変化) 台所を初め、住宅のあらゆる部分にすむ、油色の平たい害虫。さわりと臭い。あぶらむし。(「ゴキブリ科」から「ゴキブリ」かぞえた「1」)

という用例を引用しながら、「さわり」なのだ。しかもその指を嗅いでみたんだ。辞典編纂者も大変である」とコメントしています。

このようにして読者も著者といっしょに読み進んでいくうちに、この辞書の真の主人公「新解さん」の实像に近づいていくという、推理小説的な(?) 読み物にもなっています。本書にもイニシャルで登場する「知人」自身の手になる類書が、夏石鈴子著「新解さんの読み方」(角川文庫、2003)です。ぜひあわせて読んでみてくださいね。

こんな辞書もありました 1

これは英語—エスペラント語の辞書です。エスペラント語は、諸民族が平和に、自由にコミュニケーションできるようにとの願いを込めて、1887年に創案された国際語。別のページには、もとの所有者のサインとともに、「Osaka, 21, Jan. 1921a」と記されています。



むかしの辞書の 再評価

明治から昭和にかけて、もともと愛用されていた国語辞典のひとつ「言海」が復刻されて話題になりました(天根文彦著、ちくま学芸文庫、2004)。

「国語辞典」と呼ばれるもののスタイルをつくった一冊として人気を博していたもので、豊富な用例と語義、簡潔な文体で対象を過不足なくとらえ、その文章は名文の見本としても知られています。また、巻頭の「語法指南」のページでは、「日本最初の近代的な文法書」としても活用されていたそうです。では、ここでも「まぐろ」という項目を引用してみましょう(読みやすくするため、かなづかいなどを修正しました)。

まぐろ

(眼黒の義、或は云、真黒かと) 魚の名、大なるは八九尺ばかり、全身、青黒色にして、鱗なく、腹は白くして雲母のごとく、頬の下に青き斑あり、頭、大きく、背、尖り、鼻、長く、口は唇下(がんた)にあり、背に刺鱗(しりょう)あり、死すれば、眼より血出ず、肉の色、赤し、鰹内に、ハツ、西国にメグロ。

想像してみると、なんとなくマグロの姿が浮かんできませんか？

このように、辞書や辞書をめぐる本は楽しみかたもいろいろです。学問に利用するのはもちろんですが、読書のかわりとしても、ぜひ、いちど手に取ってみてください。きっとそれぞれの楽しみかたを発見するはずです。

こんな辞書もありました 2

1903年8月、日露戦争直前に陸軍参謀本部から刊行された「日露会話」。簡易辞典にもなっている、手のひらサイズの冊子です。「地理に関する会話」や「敵に関する会話」など、時代を感じさせる表現が少なくありません。



日語	ロシア語
日本	Япония
東京	Токио
大阪	Осака
京都	Кийото
神戶	Кобе
横濱	Йокоハマ
函館	Фуノダ
札幌	サッポロ
仙台	セウダイ
青森	アオモリ
岩手	イワンテ
秋田	アキタ
山形	ヤマガタ
福島	フクシマ
茨城	イバシマ
栃木	トチギ
群馬	グンマ
埼玉	サイタイ
千葉	チヤウ
東京	トウキョウ
神奈川	カネガハ
山梨	ヤマナカ
長野	チンレン
新潟	ニガタ
富山	トミヤ
石川	イシカワ
福井	フクイ
岐阜	キフ
愛知	アイチ
三重	ミエ
滋賀	シカガ
京都	キョウト
大阪	オオサカ
和歌山	ワカヤマ
奈良	ナラ
徳島	トクシマ
香川	カウケン
高松	タカマツ
愛媛	アイワン
高知	タカチ
福岡	フクオク
佐賀	サカ
長門	チンモン
山口	ヤマト
徳島	トクシマ
香川	カウケン
高松	タカマツ
愛媛	アイワン
高知	タカチ
福岡	フクオク
佐賀	サカ
長門	チンモン
山口	ヤマト